

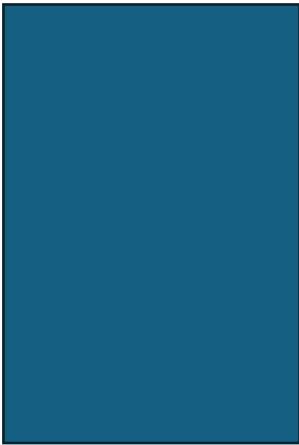
こんなものを読んできた (41)

王城 夕紀 「マレ・サカチのたった一つの贈り物」中央公論新社

校長・鈴木 健

今回、紹介するのはこの間の「図書館だより」で数学の皆川先生がおすすめていた王城夕紀の「マレ・サカチのたった一つの贈り物」です。ストーリーよりは抒情的な雰囲気が勝った感じの作品で、読後感がすごくいいですね。さすが皆川先生の一押しです。

皆川先生の「図書館だより」では、あらすじを紹介するスペースがないので読んでみて、ということでしたが、今回は紙面に余裕があるので、あらすじを紹介してみましょ。とはいうものの、なかなか複雑な話であらすじもまとめにくいのですが…。



まずタイトルの「マレ・サカチ」ですが、これは若い女性の名前です。マレは、自分の意図しないタイミングで、意図しない場所に空間転移（テレポート）してしまう「量子病」という病気にかかっています。

次にこの作品の舞台ですが、おそらく現在より数十年～百数十年先の割と近い未来です。この世界ではインターネットは現在以上に発達して、人々への影響力が強くなっています。世界は「ワールドダウン」という巨大な経済破綻から立ち直っておらず、貧富の差が拡大し、富裕層と貧困層の対立で治安も悪化する一方です。そんな破滅に瀕した絶望的な世界で、マレは量子病のために世界中のあちこちに飛ばされ、そこで様々な人たちと出会います…。

皆川先生はこの本を「自分という存在に対する疑問や不安」という哲学的な文脈からとらえていたと思います。私もそれがこの作品の大きなテーマだと思いますが、私は「世界の未来」への即物的な不安も感じました。

現在の資本主義経済の世界は、「毎年の経済成長が可能」ということを前提に成り立っています（社会主義でもこれは同じですが…。「経済成長」とは、去年より今年、今年より来年と、より多くの物やサービスを作り出していくということです。これができないと世界は行き詰ってしまいます。しかし、経済成長を続けるということは、それだけ多くの資源やエネルギーを消費するということです。また経済の流れは水と同じで、富裕層と貧困層、先進国と後進国という格差（高低差）がないと、うまく流れません。格差を維持しようとする人々と平等を求める人々との対立も深まるでしょう。いつかは、この小説で描かれた「ワールドダウン」のような事態が起こるのではないのでしょうか。

一つの本でも、どこに興味や魅力を感じるか、というのは様々です。それを人と話し合ったり意見交換をする、というのも楽しいと思います。また人から「こんな本があるよ、面白かったよ」と教えてもらうのもいいですね。今回のこの本も、皆川先生がおすすめていなかったら、私が手に取る可能性は低かったと思います。本好きな人同士で友達になって自分の読書の幅を広げられたらいいですね。